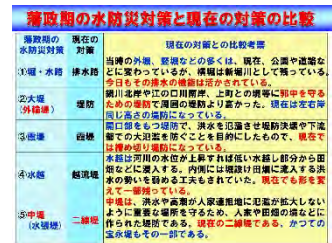
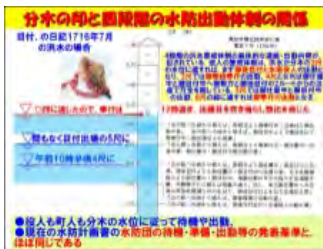
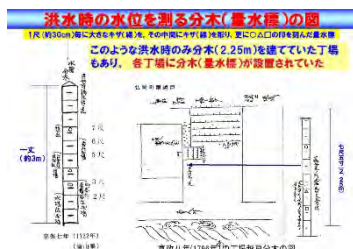
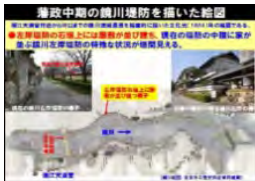


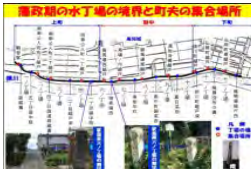
高知県の水害・治水に関する防災風土資源

整理番号	高水 1	我が国最初の掘り込み港湾（手結港）							
災害種別	水害・治水	地震・津波			土砂災害		渇水・利水		
場 所	高知県香南市夜須町手結								
見所・アクセス	高知県香南市夜須町の国道 55 号から手結海水浴場に行く交差点から約 400m 行った所に、江戸時代、郷士の普請技術を活用して大地を掘込み造った手結港であります。 これまで台風や高潮災害に負けず、今日も港の機能を果たしています。								
写真・図	    								
	写真 1 写真 2 写真 3 写真 4 写真 5								
	    								
写真 6 写真 7 写真 8 写真 9 写真 10									
解説文	土佐を作った男として、高知県に大きな貢献を残したのは野中兼山（写真 1）であります。 兼山は元和元年（1615）姫路に生まれ、4歳で土佐に移り、土佐藩家老野中家を継ぎました。17歳で奉行職について以来 30 年以上もの間、土木、港湾、山林行政や地場産業の育成などに奔走しました。特に物部川の山田堰と舟入川などの導水や仁淀川の八田堰建設での新田開発は土佐の発展に大きく寄与しました。 また兼山は治水工事に長曾我部の遺臣たちを登用しました。藩の兵農分離策で農民身分になっていた郷士をとりたて不満をやわらげる郷土制度といわれるものであります。後の幕末で活躍する坂本龍馬や中岡慎太郎などもこの郷士であります。 その郷士の普請技術をもった者など起用して大地を掘込み造ったのが 高知県香南市夜須町手結にある手結港（写真 2、3、4）であります。今も写真 5、6 のように外海にでる所に手結港可動橋が設置され写真 7 のように道路の通行時間制限が設けられており、現役として機能しています。 そのほかにも室津港や舟入川などの導水（写真 8）や仁淀川の八田堰（写真 9）なども現在でも機能しており、300 年以上も現役の防災風土資源といえます。 最後に、現在も掘り込み港湾の姿が鮮明に残っている様子が分かる航空写真（写真 10）を示します。 現在は、掘り込み港（手結港）の前には、新しい港や防波堤、埋めた地が出来ている様子が分かります。								
得られる教訓	野中兼山の掘り込み港湾の手結港などの社会資本整備は、今日の高知県の発展の礎になったことを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで	平成以降			

整理番号	高水 2	中堤(水張堤防)							
災害種別	水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水		
場 所	高知県高知市大津乙								
見所・アクセス	土佐藩は、高知城下町を洪水から守るために近隣近在に、犠牲を強いた越流堤防、中堤(水張堤防)などの水害対策を実施していました。 現在でも、重要な場所を守るために築かれた中堤、現在でいう 2 線堤が、JR 土佐大津駅から約 700m 西の高知県しらすうなぎ流通センター付近から線路北側の今土居などの現地に残っています。								
写真・図	 写真 1  写真 2  写真 3  写真 4								
解説文	土佐藩は、高知城下町の建設に取り組むに当たって、水対策として城下町の周辺に高い堤防(鏡川北岸の郭中で高い堤防)を築き、近郷近在の河川に霞堤や水越(越流堤)を建設、内陸の平地には多くの中堤(水張堤)写真 1 を設けて、重要な城下町の水害の軽減を図っていました。土佐藩は、高知城下町を洪水から守るために近隣近在に、犠牲を強いた水防対策を実施していたことがわかります。 現在でもその象徴として、重要な場所を守るために築かれた中堤、現在でいう 2 線堤が写真のように田辺島や今土居などの現地に一部残っています。 古文書等から調べた高知城下周辺の堤防整備状況を明治 39 年及び 40 年測図之縮図(写真 2)に示します。その名残が残る国分川、舟入川の周辺低平地の現在の様子を示した航空写真を写真 3 に示します。 また、平成 10 年 9 月 25 日には、写真 3 の左上のように、98 高知大水害と呼ばれた水害で、国分川、舟入川の多くの周辺低平地を中心に大きな浸水被害を被りました。 「河中」(こうち)の地名の由縁を忘れた水害ともいえ、自然界からすれば起こるべくして起こった災害といえます。 最後に、写真 4 に、藩政期の水防対策と現在の対策を比較した表を示します。表のように大堤、霞堤、水越の堤防は、連続堤防など変化し今日に引き継がれ、今日の高知市の水害の被害軽減に結びついています。しかし、中堤は、水張堤の機能が、現在の 2 線堤であったものの多くが撤去されています。中堤が一部が残っている場所では、98 高知水害の氾濫時には被害を軽減した場所があったそうです。								
得られる教訓	藩政時代には中堤(水張堤防)をつくって重要な地域を守った、現在の 2 線堤のような機能を果たした水災対策があったことに学び、今後の水災対策に活かすことを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで	平成以降			

整理番号	高水 3	分木(ぶんぎ) 藩政期の量水標							
災害種別	水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水		
場 所	高知県高知市唐人町								
見所・アクセス	土佐藩は、水防体制を取る上での指標として、鏡川に分木(ぶんぎ)、量水標を設置して水位の測定をしていました。当時は真如寺橋(現天神橋)川岸などに分木【(高さが1丈(約3m)で、地上より1尺(約30cm)毎に大きなキザ(線)、中間に小さなキザ(線)を彫り、更に水防体制の基準になる水位の所に○△□の印を刻んだ量水標】を設置していました。								
写真・図	 写真 1  写真 2  写真 3								
解説文	土佐藩は、水防体制を取る上での指標として分木(ぶんぎ)、量水標(写真 1)を設置して水位の測定をしていました。 享保 7 年(1722 年)の分木(写真 1 の右の図)には、「○印の上の 7 尺の線は惣出、6 尺は奉行出場、5 尺は仕置役、目付役出場、3 尺は町奉行、普請奉行出場、2 尺是水場役出勤」とあり、洪水時に、出勤を要する水位をあらかじめ 3 段階に定められおり、現在の通報水位や警戒水位、はん濫危険水位にも通ずる洪水警戒体制が取られていたことがわかります。 また南路志には、「○惣出貝吹、△御奉行所、御普請奉行、□御町方下役、御普請方先遣」とあり、間日雑集には「○惣出、×御仕置御勤、御奉行中へ注進、△御普請奉行御出勤、仕置所へ注進、□水場役人出場」とあます。洪水の警戒体制は年代は不明ですが、○、△、□の 3 段階から○、×、△、□の 4 段階の体制に変わっていることがわかります。 その 4 段階の洪水警戒体制の具体的な連絡・出勤内容が、寛政 7 年(1795 年)の分木の図(皆山集)写真 2 に記されています。それによると役人の警戒体制は、洪水が分木の 2 尺の水位に達すれば、まず御徒目付と水場役人の出勤となり、3 尺では御普請奉行の出勤、4 尺となれば御仕置中と御目付中へ御郡方と御徒目付の 2 ルートからの注進で万全を期しています。5 尺では御仕置中と御目付中の出勤、6 尺の線に達すれば御奉行の出勤となっています。このように土佐藩は、洪水時に出勤を要する水位を○、×、△、□の印にあらかじめ定め、現在にも通ずる 4 段階の洪水警戒体制が取られていたことがわかっています。 さらに寛政八年(1796 年)の丁場越戸分木の図を写真 3 に示す。分木は、左の図のように高さが 1 丈(約 3m)で、地上より 1 尺(約 30cm)毎に大きなキザ(線)を、その中間にキザ(線)を彫り、更に○△□の印を刻んだ量水標であった。右の図のような洪水時のみ分木(2.25m)を建てていた丁場もあり、各丁場に分木が設置されていたと考えられます。 分木は、現在の水防体制のルーツが見える貴重な防災風土資源です。								
得られる教訓	藩政時代から分木(量水標)が設置され洪水の状況を把握し、水防を行っていたことに学び、この 4 段階の警戒システムが今日の水防体制に引き継がれていることを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで	平成以降			

整理番号	高水 4	藩政期の堤防構造（準スーパー堤防）を残す鏡川							
災害種別	水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水		
場 所	高知県高知市唐人町								
見所・アクセス	土佐藩は、高知城下町を洪水から守るために鏡川北岸に大きな堤防を築きました。文化元（1804）年の鏡川絵図からは、鏡川堤防の石垣上には屋敷が並び建ち、現在の天神橋周辺、唐人町等の鏡川左岸堤防の特殊な状況が確認できます。 こうした時代から現在の鏡川の準スーパー堤防の土台ができたと考えられます。								
写真・図	 写真 1  写真 2  写真 3  写真 4  写真 5  写真 6  写真 7								
解説文	山内一豊が入国した当時、高知は「河中」と呼ばれ、鏡川と江ノ口川に挟まれた2つの河の中に開けた土地でありました。このため土佐藩は、高知城下を洪水から守るため、堀や堤防の整備を図っていました。 高知城下町の水害対策は、現在の航空写真（写真1）で示すように、高知城の周辺に家臣を集め住ませた郭中を中心とし、郭中の西に接して武家奉公人と町人の雑居の上町と郭中の東に接する商人と手工業者の居住地の下町を対象としていました。 土佐藩は、高知城下町を守るために、北川（江の口川）と南川（鏡川）に挟まれた城下町に堤防を整備しました。写真2の明治39年及び40年測図之縮図などで概略、確認することができます。 江戸時代には、幕府が諸藩に命じて正保元年(1644年)に作成させた正保城絵図があります。この正保城絵図（写真3）には、高知城郭内の建造物、石垣の高さ、堀の幅や水深、堤の高さなどが詳細に記載されています。 この高知城下町の正保城絵図から堤防高を読み取った江戸時代の高知城下町の堤防の高さを表す堤防整備状況を写真4の図に示します。この図から土佐藩は、高知城下町の建設に取り組むに当たって、洪水対策として城下町を囲む高い堤防を鏡川北岸、江の口川南岸の郭中で1間3尺(2.8m)の高さの堤防を築き、思案橋から鏡川の岸までの上町で4尺(1.2m)上町五・四丁目は六尺(1.8m)、下町の掛川町、弘岡町東部は1間1尺(2.2m)、雑魚場より東の堤防は5尺(1.5m)の高さの堤防が築かれています。 松尾他（2013）高知の藩政期の水防災対策の再評価の研究によれば、江戸中期には、観音堂から雑魚場まで、「土台を所々1間9尺～2間(3.5m～3.8m)南に広げ、上部も所により3～4尺(0.9m～1.2m)の堤防嵩上げを行った」記録があり、鏡川の北岸は、延長3kmを越える長大な4m程度の高さの堤防が整備されていたと推定されています。また潮江天満宮付近から河口までの鏡川流域風景を絵画的に描いた文化元（1804）年の絵図（写真5）からは、左岸堤防の石垣上には屋敷が並び建ち、現在の堤防の中腹に家が並ぶ鏡川左岸堤防の特殊な状況が垣間見えます。 こうした時代から現在の鏡川の準スーパー堤防の土台（写真6、7）ができたと考えられます。								
得られる教訓	藩政期は左右岸のバランスを取らない堤防築造が行われ、重要な地区を守るための治水対策が行われていたことを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和30年代まで	昭和60年代まで	平成以降			

整理番号	高水 5	水丁場（みずちょうば）									
災害種別	水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水				
場 所	高知県高知市鷹匠町 2 丁目										
見所・アクセス	高知市鷹匠町 2 丁目、柳原橋西の忠霊塔がある鏡川北岸の現地には、六と七丁場の境界を示す標柱と標柱案内板が設置され「江戸時代、鏡川流域の洪水による災害を防ぐために設けられた受け持ち区域の境界を示す標柱である」ことなどが記されています。										
写真・図											
	写真 1		写真 2		写真 3		写真 4				
解説文											
	写真 5										
解説文	土佐藩は、高知城下町を洪水から守るために水丁場制度というものを設けて、城下町の鏡川左岸堤防約3kmを約270mで11分割（写真2）して、組単位で水防を行っていました。 皆山集（写真3）には、各組には組頭、普請役1人、普請方の郷士2人、庄屋付き添いの町夫30人が所属していたこと、および丁場用具の収納御蔵、丁場の境界についても明らかにしています。また、町夫の集合場所が、写真2の図の●印に示されているように、最上流の観音堂から最下流の弘岡町東越戸まで、11箇所、各丁場の別に定められていたことがわかります。 これより後、明治時代になって、明治政府は、明治2年に観音堂から雑魚場までの鏡川左岸堤防を六に分割（一ノ丁場から六ノ丁場）して、藩政時代と同じ水防方式を取っていたことがわかっています。最上流の集合場所であった観音堂は、改築されているものの現在も写真4のように旧堤防沿いに残っています。 このような場所など、水防の際には、家老は現地の商家などに本陣（水防指揮所）を構えて水防の指揮を執り、町夫は、庄屋引率の元に出夫していました。また、江戸時代の町夫の多くは文盲であったために、水火の時には、集合地点に字ではなく絵の描く幟（夜は灯籠）を用いていたという記録が、皆山集の水火事変の節出張幟図にあります。幟（のぼり）には各町に関連のある絵が描かれていたため、文字を読めない人々は自分の町の絵を見て幟の元に集合をしていたといえます。現在の現地災害対策本部であり、現地での即行指示により水防にあたっていたことがわかります。 水丁場には、享保（1716～1736）年間の頃までは、水丁場の境界を示す印の杭が建てられていましたが、その後、いつの時代か杭は石柱に建て替えられました。水丁場の境界は幕末、明治初頭に変更されていますが、境界の石柱はそのままにしていたらしく、明治以降の堤防工事などにより多くは取り除かれ散逸したものの、現在も鏡川の旧堤防上などに一部が残っています。 高知市鷹匠町 2 丁目、柳原橋西の忠霊塔がある鏡川北岸の現地には、標柱案内板（写真1）が設置され、「江戸時代、鏡川流域の洪水による災害を防ぐために設けられた受け持ち区域の境界を示す標柱である」ことなどが記されています。 石柱には、「従是西六丁場、従是東七ノ丁場」と刻まれ、この石柱は、六と七丁場の境界石柱であったことがわかります。現在では、受け持ち区域を決めた水防は行なわれていませんが、重要水防区域は、水防計画書などに記載され公表されており、今日は地域を守る水防主体は消防団が担っています。 最後の写真5に鏡川の洪水から水丁場制度で城下町を守った鏡川左岸堤防区間3km 区間のおよその位置を2007年10月撮影の写真に示します。										
	得られる教訓	藩政期からの伝統的な水防が今日にも受け継がれ、地域を守る水防が現在も行われていることを教えています。									
	教訓分類	被害防止		準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
	時代	江戸時代以前		江戸時代		明治・大正	昭和 30 年代まで		昭和 60 年代まで		平成以降

整理番号	高水 6	藩政期の鏡川堤防決壊記録（わざと切り）							
災害種別	水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水		
場 所	高知県高知市天神町								
見所・アクセス	土佐藩は高知城下を大洪水から守るために潮江堤防を破壊して鏡川の洪水を潮江地区に流し込み、鏡川の水位を下げる方法を最後の手段として用意をしていたと云われています。 古文書には潮江堤や天神の森を「切る」という表現があります。現在の天神橋付近の鏡川右岸堤防と思われます。								
写真・図	 写真 1  写真 2  写真 3  写真 4  写真 5								
解説文	古文書に残る藩政時代の鏡川右岸（潮江）堤防は、表（写真 1）のように、寛文 1 年（1661 年）から安政 4 年（1857 年）の約 200 年間に 17 回の決壊記録が残っています。単純には 12 年に 1 回程度、決壊していたことになります。決壊場所は天神の森井流（水門）付近（写真 2）から役知にかけての堤防が多くなっています。「堤切れ水潮江へ押し込み申すに付き大川の水急に干る」と潮江堤防が決壊すれば、大量の氾濫水が潮江地区に流れ込み、鏡川は急速に減水して城下の洪水は終息に向かう（写真 3）言います。 土佐藩は高知城下を大洪水から守るために潮江堤防を破壊して鏡川の洪水を潮江地区に流し込み、鏡川の水位を下げる方法を最後の手段として用意をしていたと云われています。 表（写真 1）には潮江堤や天神の森を「切る」という表現があります。城下が危なくなったので強制的に堤防を切ったことを示しているとも考えられます。その回数は約 200 年の間に 8 回あります。 これは、堤防をわざと決壊させ、そこからこの膨大な水を流して重要な場所の被害を軽減する江戸時代には、度々行われてきた方法で「わざと切れ」と呼ばれていたものです。 しかし、潮江の堤防が再三決壊をしているのに対して、城下の大堤（鏡川左岸堤）が決壊したという記録は見つかりません。このことは、城下町を守るため、左岸堤防を強く大きくしたことと、潮江の堤防を鏡川左岸堤防なみに強く高く築くことをせず、城下側堤防よりも低く強度もいくらか弱めに築いていたと推察することもできます。そのせいか、現在の鏡川左岸堤防は写真 4 のような準スパーク堤防になっています。 現在の航空写真（写真 5）に、江戸時代の鏡川の「わざと切れ」の場所と氾濫水が流れ込んでいた潮江地区の発展した今日の様子を示す。								
得られる教訓	藩政時代は、重要な城下町を守るため対岸の堤防を切るという今日では考えられない水防対策が行われていたことを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで	平成以降			

整理番号	高水 7	八田の二重堤防							
災害種別	水害・治水	地震・津波		土砂災害			渇水・利水		
場 所	高知県吾川郡いの町八田								
見所・アクセス	仁淀川の八田堰下流左岸には、野中兼山が築いたとされる珍しい2重堤防が、用水路を挟み現在も残っています。 用水路の底には弁があり、仁淀川からの漏水による圧力を逃がすように工夫されています。								
写真・図	 八田の二重堤防  兼山により整備された仁淀川堤防等  八田堰下流左岸にある二重堤防  現在の用水路と八田の二重堤防 写真 1 写真 2 写真 3 写真 4								
解説文	八田堰下流左岸には、野中兼山が築いたとされる珍しい2重堤防が現在も写真1のように残っています。 この八田の二重堤防は、兼山が水害防止上の通例をこえて平地に高く築いた二重堤防であり、当時他所では見ることのないもので、仁淀川氾濫の非常時に備え、また開墾地保護の一策として築かれたものです。 野中兼山（川添陽著）によれば「東岸に於て川に接する普通の水害阻止め堤防以外に、八田堰なる弘岡井取水口水門の堤を基点として弘岡井の西側に添ひ、南に赴きて八田の南端に達し、更に行當（ゆきとう）岩屑地に始まりて弘岡上ノ村の西部を南し新川の西を森山村の山の手に達する遠い間に、壮大なる特殊の大堤防築設（写真2に示す位置と思われる）す。それが水害防備上の通例を越えた例外の、平地に高く築く二重堤防で、當所以外の地において見ることを得ざる特殊の設備として世にいちじるしく、今日は此の特設を通行の道路にあてて水防と水路の兼用となっている」とあり、現在もその2重堤防の構造が八田堰（写真3）から下流の左岸堤防に残っています。 現在の用水路は、写真4のようにコンクリートであります水路の底には、フラップ弁が設けられており、仁淀川からの漏水による圧力を逃がすように工夫されています。そのため、仁淀川の洪水時には堤防裏に水がたまった状態で、現在の水防工法の月の輪が大規模に設けられているようなものになっています。堤防の負荷（水頭差）を小さくし堤防を守る構造となっています。								
得られる教訓	堤防の漏水対策として洪水時に堤防裏に水を貯め、堤防の負荷（水頭差）を小さくし堤防を守る構造に学ぶことを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代		明治・大正	昭和 30 年代まで		昭和 60 年代まで		平成以降

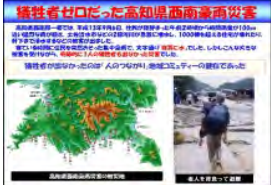
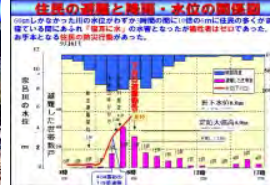
整理番号	高水 8	番持石（ばんもちいし）							
災害種別	水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水		
場 所	高知県土佐市高岡町甲 2 1 7 7								
見所・アクセス	土佐市市民図書館の横の囲い中に、番持石（ばんもちいし）と呼ばれる石があります。 番持石は仁淀川の支川波介川（はけがわ）流域の洪水で流死した人の冥福を祈るための、供養塔の一部であったと云われています。								
写真・図	 写真 1  写真 2  写真 3  写真 4								
解説文	仁淀川の支川波介川（はけがわ）流域の土佐市市民図書館の横の囲い中に、写真 1の番持石（ばんもちいし）と呼ばれる石があります。番持石は、用石北山の小野坂あたりにあった 1 0 坪ほどの空地で地元の青年達がが力自慢に番持ちをやっていた石で約 80kg あります。 土佐市史によると「用石北山の小野坂を南へ県道が屈曲して用水を小橋で渡った所に、1 0 坪ほどの空地があった。ここで夏の宵によく青年が集まって力自慢の番持ちをやっていた。担いだ石は重さ約 80kg ほどの直方体の砂岩であった。雨の日などには、この石を台に藁を打って縄をなうというのもあった。この石に字の彫ってあるのに気のついたのは、終戦後のことであった。 次に示すように、まことに無残な水害の実を語るものであった。石に表面には、（奉 建立 為流死亡者菩提 文政 12 年(1829) 己丑 3 月 24 日 世話人 用石村、中島村）と刻まれている。この碑文から考えると、番持石は実はおそらく前年の洪水に流死した人の冥福を祈るための、供養塔の一部であったのであろう。 この文政 11 年(1828)の洪水について(中略) 供養塔を建てるほどのひどいものであった。しかもこの洪水の教訓が、土佐市流域の水防、治水の歴史に画期的な一頁を作ることになる。」とされています。今後の地域の水害の歴史を振り返る逸話として、水害対策の参考になるものです。 仁淀川の支川波介川（はけがわ）流域の土佐市の中心街（写真 2）は、底典型の地形のため過去、多くの水害（写真 3）を被ってきました。この洪水、地域の 200 年以来的懸案であった波介川河口導流堤防や水門（写真 4）が平成 24 年 5 月に完成し住民の藩政時代から悲願が達成されています。								
得られる教訓	防御の水準を越えることも考え、水害に立ち向かうためには、番持石の刻字が気づかせた地域の身近な水害の歴史に関する逸話に学び、備えることを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで	平成以降			

整理番号	高水 9	寸志夫（すんしふ）								
災害種別	水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水			
場 所	高知県土佐市波介									
見所・アクセス	高知県の土佐市には、「寸志夫」（すんしふ）という言葉があります。 高知県の波介川に関する史料によると、川底を「寸志夫」（すんしふ）で掘るという記録が残されています。									
写真・図										
	写真 1			写真 2			写真 3			
解説文	高知県の土佐市には、「寸志夫」（すんしふ）という言葉があります。高知県の波介川（写真 1）に関する史料によると、川底を「寸志夫」（すんしふ）で掘るという記録が残されています。									
	寸志夫とは、自発的に無償で仕事をすることです。今日で言うところの「ボランティア」のことです。藩政期の波介川では、川の水はけを良くするために、村人たちが自発的に川底を掘る作業を行っていました。									
	土佐市史によると「文政十一年（1828）、大洪水に見舞われた時、村の人々は庄屋を中心に話し合い、波介川の水はけを良くして、洪水による被害を少なくするために、川床を掘る作業をすることにしました。」藩からの命令ではなく、村人が自分たちの意志で自発的に出たので、「寸志夫」と呼ばれています。この時に村人が川床を掘ったのは、初田と出間の二箇所でした。これは、波介川の全長から言うと、ごく部分的なものでした。しかし、これ以降、村人は村を水から守るためには藩に頼るだけではなく、自分たちも必分の協力をしようというようになりました。									
	寸志夫を実行するために見事な組織が作られていました。									
	村々に差配役が組頭級から選ばれて、銀、米、その他の調達をしました。責任者の庄屋は現地に詰めました。また、監督に来る郷廻の役人の接待から祈祷のための神官、僧侶の接待、さらに角力場、角力取りの宿割りからはじまって警備まで行き届いていました。経費については、地主、富裕層が負担していました。封建社会の中で人々は忍苦を強いられながらも自覚を高めていたのです。このような村人の熱意が藩に届き、その後、藩による波介川の改修工事につながるようになりました。そして高知県や、国の波介川の改修工事に受けつがれました。昭和 50 年には写真 2 のような大きな水害を受けました。									
	地域の 200 年 以 来 の 懸 案 で あ っ た 波 介 川 河 口 導 流 通 水 式 が 平 成 2 4 年 5 月 1 9 日 行 わ れ 、 現 在 、 写 真 3 のような波介川河口導流堤防や水門が完成し住民の悲願が達成されています。									
得られる教訓	災害に立ち向かうためには、今も昔も、寸志夫の協働の精神に学ぶべきです。この寸志（ちいさなころごし）夫という言葉は、無形の防災風土資源として継承すべきと教えています。									
教訓分類	被害防止		準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前		江戸時代		明治・大正	昭和 30 年代まで		昭和 60 年代まで		平成以降

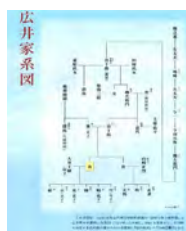
整理番号	高水 1 0	四万十町の明治 23 年水害碑							
災害種別	水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水		
場 所	高知県高岡郡四万十町仕出原								
見所・アクセス	高知県四万十町の JR 窪川駅より北西へ直線距離で約 2km 行った、高岡神社境内に四万十川の大洪水で大きな被害が出た明治 23 年水害碑があります。 上流の東津野村で山崩れが起こり、土砂が川の水をせき止めて貯まった水に耐えきれなくなった土砂が崩壊して一気に下流に流れて、大被害をもたらしたと云われています。								
写真・図	 写真 1  写真 2  写真 3  写真 4  写真 5								
解説文	高知県四万十町の JR 窪川駅より北西へ直線距離で約 2km 行った、高岡神社境内に四万十川の大洪水で大きな被害を出した明治 23 年水害碑（写真 1）があります。この碑を拡大したものを写真 2 に示します。 水害碑のある高岡神社は、四万十川沿いに位置し、「新四国のみち 霧の四万十・五社街道」という看板（写真 3）が神社横に設置されており、道の駅「あぐり窪川」からの四万十川の散策路の一部になっています。写真 4 ように四万十川からおおよそ 200m 先の山裾にあります。明治 23 年水害碑は、写真 5 のように高岡神社の鳥居の横にあります。 明治 23 年(1890) 9 月 11 日に四国地方を横断した台風は、四万十川流域に大雨をもたらしました。豪雨は流域の各地に洪水被害を招きましたが、急に水位が下がり、天候も 回復してきました。人々が安心した時、大音響とともに四万十川沿いに激流が押し寄せ、大被害が発生しました。 四万十川上流の東津野村で山崩れが起き、土砂が川の水をせき止めていましたが、貯まった水の量に耐えきれなくなり、せき止めていた土砂が崩壊して一気に下流に流れて、大被害をもたらしました。四国防災八十八話の 44 話では「明治二三年（18900）、二、三目前から降り続いた雨は、しだいに激しくなり篠突く豪雨となりました。特に四万十川上流の東津野、梶原郷は水量がものすごく、谷川は増水して氾濫し濁流は山肌をえぐり、山々の山腹から水が突き出て、山崩れが起きました。水は谷あいや平地の家々に溢れ、近辺の田畑もみるみる水没しました。上流から根こそぎの流木が押し寄せ、牛馬が流され、遂には住家まで、ものすごい勢いで川下に流される有様でした。 しかし、夕方になると四万十川の水は急に引き始め、さらには急に止まるほどとなり、やがて西の方から 陽が差し出したのです。川の水はどろ濁りでしたが、普段と少し違う程度でようやく落ち着きを取り戻していました。松葉川や西川角などでは近所の人々が道端に集まり、凄まじかった水の出方を話すなどの光景も見受けられました。ところが、それから一、二時間たったと思われた時刻に、にわかに大音響が起きました。すさまじい山鳴りがとどろき、大激流が田畑、家屋を押し流し、その大濁流の中を人々は無我夢中で家の裏山や丘へ逃げまどい避難しました。比較的平地にある流域の集落はほとんど水没し、牛馬が流され、不意をつかれた人たちは数多くの死傷者を出しました。家もろとも家人もそのまま流され、家の草葺きの屋根の上にしがみつきながら助けを求めているという悲惨な状況でした。上流の東津野村で山崩れが起こり、土砂が川の水をせき止めていましたが、貯まった水の量に耐えきれなくなり、土砂が崩壊して一気に下流に流れて、大被害をもたらしたのでした。」とあります。								
得られる教訓	洪水時に不自然な河川の水位の低下には警戒することを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで	平成以降			

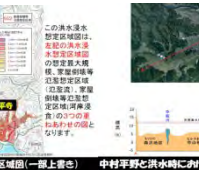
整理番号	高水 1 1	四万十川の穿入蛇行							
災害種別	水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水		
場 所	高知県高岡郡四万十町大正								
見所・アクセス	J R 予土線土佐大正駅西方の四万十川中流域は、蛇行状に曲がりくねった谷の中を流れる穿入蛇行が発達していることで有名です。								
写真・図	   写真 1 写真 2 写真 3								
解説文	高知県四万十町の四万十川の中流では四万十川が大きく蛇行を繰り返しながら大正で最大の支流である梶原川と合流します。 このような蛇行状の曲がりくねった谷の中を流れる河流の状態を穿入（せんにゅう）蛇行といいます。穿入蛇行は、流域の山地が隆起する前に蛇行していた河川が、山地の隆起に伴い、山地を削り込みながら蛇行を続けたと考えられています。 四万十川は穿入（せんにゅう）蛇行（写真 1）が発達していることで有名な一級河川であります。 山地が蛇行する四万十川はの水衝部（凹岸）は、急傾斜の攻撃斜面となっています。これに対して、対岸の凸岸は、滑走斜面と呼ばれ、河床には蛇行州が形成されます。 四万十川沿いの集落の多くは蛇行州が隆起した河岸段丘上に立地しています。 詳しくは四国の地盤 88 箇所 42 番で、写真 2、3の資料のように紹介されています。								
得られる教訓	穿入蛇行河川の凸岸の河床に形成された蛇行州での砂礫や凹岸の岩盤上の巨礫などの堆積の特徴などから川の浸食作用などを特徴を知ることを行っています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで	平成以降			

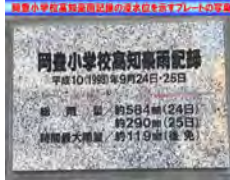
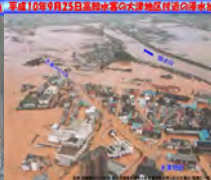
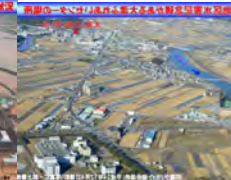
整理番号	高水 1 2	一条神社（昭和 10 年洪水避難場所）							
災害種別	水害・治水	地震・津波		土砂災害		渇水・利水			
場 所	高知県四万十市中村本町 1 丁目 3								
見所・アクセス	昭和 10 年台風の豪雨により、夕方、後川堤防が破堤し中村のまちは全町水に没し、大海のようになりました。 「町内全域停電で、真暗闇の中を懐中電灯を頼りに各自助け合いつつ雨中、一条神社、天神さま、土生山へ我先と避難し町は、阿鼻叫喚のちまたと化した。」と体験者が語っています。								
写真・図	写真 1 写真 2 写真 3 写真 4 写真 5								
	写真 6 写真 7 写真 8 写真 9								
解説文	昭和 10 年（1935 年） 8 月 27 日、台風による降雨が強まり、渡川（四万十川）と後川が甚だしく増水した。具同では 28 日午前 7 時に 3.70m の水位が、翌 29 日には最高 12.07m に達した。27 日の夕方、後川堤防が破堤し中村のまちは全町水に没し、大海（写真 1）のようになった。また、破堤したのが夕方で満水が夜中であり、死にものぐるいの阿鼻叫喚の中での避難にもかかわらず、一人の死者も出なかったことは全くの驚異であると伝えられています。 四国防災八十八話の 46 話では地元の方の体験談として「全没した中村の町は、阿鼻叫喚のちまたと化した」と昭和一年（一九三六）幡多郡東山村（現在の四万十市安並付近）の助役は語っています。 「いよいよ大事態となったぞ」渡川と後川の増水がはなはだしいので、老人たちが「明治二三年（一八九〇）ほどの洪水になるぞ」と言いだした。水位はますます高くなる。拙宅（安並にあった自宅）の下民家の荷上げの手伝い、豪雨の中の作業はみんな懸命であった。人は皆高い家に避難した。夕方になってその家が流れるというので、屋根へ上がって綱で近くの大木に繋ぐ。西久保の民家の二階がつかまり、やがてその家も全部流れてしまった。このとき初めて家の流れるさまを見た。屋根の丸瓦が沈むまでは流れないが、根の瓦が見えなくなると浮いて流れる、無惨な光景であった。（中略）それまでに二七日の夕方、急に後川右岸が破堤して、中村町（現在の四万十市中村付近）に洪水が流れる惨事が起こった。町の警察、消防団、幡多支庁、町役場は驚いて、警察は半鐘を鳴らして緊急避難を伝えた。驚いた町民は夕方の雨中、奔流の中を古城山一条神社（写真 2）、天神さま、土生山へ我先と避難。（中略）町の人達も明日は大水で堤防が切れるという警報に、死にものぐるいであったという。その晩公園山（古城山）その他では、野宿、町内全域停電で、真暗闇の中を懐中電灯をたよりに各自助け合いつつ避難した。夜中の懐中電灯の光とざわめきと叫びは夜の明けるまで公園山に続いた。阿鼻叫喚とはこのことか、後川を隔てた私の家には台風の中とぎれとぎれに聞こえた。今でも私の耳の中には、その声が聞こえてくるようである。」とあります。写真 3～7 は、その時の住民の避難場所になった一条氏の中村御所館跡が古城山であった一条神社の現在の写真です。写真 8 は、四万十川と後川に挟まれた中村の街の中心部にある一条神社の場所を示す航空写真、写真 9 は、現在の四万十市 洪水・土砂災害ハザードマップに一条神社の位置を示す。								
得られる教訓	阿鼻叫喚の夜の避難に備え、災害が夜間に起こった時の備えをしておくことを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで	平成以降			

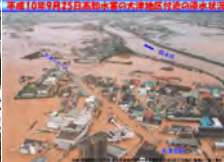
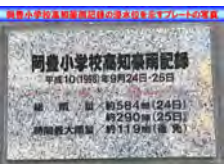
整理番号	高水 1 3	犠牲者ゼロ水害（西南豪雨災害）							
災害種別	水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水		
場 所	高知県土佐清水市下川口								
見所・アクセス	高知県西南部豪雨災害で大きな被害を出した宗呂川沿川の土佐清水市下川口では、豪雨災害を忘れないためにと下川口小学校の浸水表示板や下川口郵便局の災害記念碑などが、多く建立されています。 土佐清水市下川口へは、足摺海底館がある竜串から西に足摺サニーロード（県道 321 号線）を約 2.5km 行くと下川口漁港、宗呂川河口に出ます。								
写真・図	 写真 1  写真 2  写真 3  写真 4								
解説文	高知県西南部一帯（写真 1）では、平成 13 年 9 月 6 日、住民が寝静まった午前 2 時頃から雨は激しさを増しました。 時間雨量が 100 mm 近い猛烈な雨が 4～5 時間続き、土佐清水市などの 2 級河川が急激に増水し、1000 棟を超える住宅が壊れたり、軒下まで浸水するなどの被害（写真 2）が出ました。 寝ている時間に住民を突然おそった集中豪雨で、文字通り「寝耳に水」でした。しかしこんな大きな被害を受けながら、奇跡的に 1 人の犠牲者も出なかった災害でした。 地域の住民の方は行政の避難勧告の前に危険を察知し、助け合いながら自主的避難を行っていました。地元の住民で構成される消防団からの呼びかけで避難をした人が最も多くなっていました。役所が避難勧告を出した時には半数以上の人が避難を終えていました（写真 3）。 消防団の呼びかけや自主的な避難がポイントだったのです。また消防団員からは「首まで水につかりながら 1 軒 1 軒の家を回った」とか「2 階で助けを待っていたおばあちゃんを背負って避難した」というケースがいくつも報告されています。どこにどんな人が住んでいるかをよく知っていることが大事なことがわかりました。 人の命を救った秘訣は、地域コミュニティの顕在であり、「人の命を救ったのは人のつながり」だったのです。また、この犠牲者ゼロの水害の体験談から導き出した 10 の教訓を「住民の防災心得十箇条」として、地域防災力の向上をめざす各地の取り組みにとって参考になるものが生まれました。 特に大きな被害を受けた土佐清水市下川口の地域は、大正 9 年、昭和 6 年など過去にも大水害を経験しており、土佐清水市史によると、大正 9 年 8 月 15 日の豪雨災害は言語に絶する惨状を呈したと記されています。この大正 9 年の水害でも下川口村では犠牲者はゼロでありました。 これは、地域コミュニティの顕在などに代表される災害の体験や学習を通じて得られる防災に関する知識やノウハウが地域社会で培われていた文化があったからと考えられます。 これから他の地域においても、自然災害に対して、地域（水防団等）の公的扶助や住民同士の相互扶助の共助が中心となって災害の当事者である住民を助け、また共助が機能しない場合にも、住民は災害の特質を知り自らの命を守る対処法を心得、災害を凌いでいくことが必要と考えられます。 被災 8 年後の宗呂川は河道の整備が整い水害の記念碑が写真 4 のように各所に建立されています。								
得られる教訓	声がけで犠牲者ゼロにできること、人の命を救ったのは、人のつながりであったことを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで	平成以降			

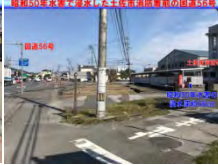
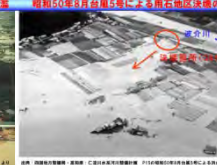
整理番号	高水 1 4		宿毛総曲輪（そうくるわ）と河戸堰						
災害種別	水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水		
場 所	高知県宿毛市中央 2 丁目								
見所・アクセス	洪水から宿毛全域を防ぐようにした藩政時代の宿毛総曲輪は、宿毛字河戸上から同字廻り角までの延長 2800m、幅員 6～10m、高さ 4～6m の大規模なものであった云われています。 現在は松田川の右岸堤防がその役目を果たしています。また、河戸堰は可動堰になっています。								
写真・図									
	写真 1		写真 2		写真 3		写真 4		
									
	写真 5		写真 6		写真 7				
解説文	宿毛総曲輪とは河戸堰から下流の松田川右岸と、中新田から貝塚に至る宿毛をとりまく堤防（写真 1 の宿毛市史の図）のことであります。 宿毛市史【近世編-野中兼山と宿毛-】によると「この総曲輪と河戸堰は、ともに野中兼山の指導のもとに行われた工事で、現在でも宿毛の生命線となっているほどで、宿毛にとっては極めて重要なものである。もしもこの総曲輪が無かったならば、宿毛の町はどうなるであろうか。少しの洪水でも宿毛の町は水びたしとなり、すべてが流されてしまうにちがいない。 大正 9 年の洪水で、この堤防が切れ、宿毛町内で死者 4 0 余名という大被害が出たことをみても、この総曲輪の重要性がわかるのである。 河戸堰からの用水は今も宿毛の町を流れて町の用水となり、さらに西流して宿毛の水田をうるおしているのである。さて、この総曲輪や河戸堰ができるまでの宿毛の状態はどうであったであろうか。宿毛平野は今でこそ一筋の松田川（写真 3）が南部に流れているにすぎないが、当時はこの本流のほかに古川、清水川、牛の瀬川の分流が宿毛平野の中を流れ、少しの洪水でもたちまち氾濫するという状態であったと思われる。 これらの分流を一つにまとめて荒瀬川に合流させ、宿毛平野の周りに大堤防を築いて、洪水から宿毛全域を防ぐようにしたのがこの宿毛総曲輪である。この総曲輪並びに河戸の堰は、万治元年（1 6 5 8）に完成したのである。この総曲輪は、宿毛字河戸上から同字廻り角までの延長 2 8 0 0 メートル、幅員 6 ～ 1 0 メートル、高さ 4 ～ 6 メートルの大規模のものである。」とあります。 以上の宿毛市史のことを要約すると野中兼山が宿毛のまちを洪水から守る堤防（総曲輪）を様々な工夫をして築いて、宿毛対岸に水越堤防を設け洪水の時には、先にこの堤防を越えさせ洪水位を下げ宿毛の安全をはかったといえます。 当時は、水害から宿毛のまち（城下町写真 5）を守るために、堤防と越流堤の整備などの対策がとられていたことが分かります。現在は写真 2、3、5 のような立派松田川の右岸堤防となって写真 5 の宿毛の街を守っています。また固定堰であった河戸堰は、現在写真 6、7 のような可動堰に改築されています。								
得られる教訓	重要度の高い地域のダメージポテンシャルをあげないため、昔は対岸に越流堤を設けるなど、二重の安全策を講じていたことを教えています。								
教訓分類	被害防止		準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード ソフト
時代	江戸時代以前		江戸時代		明治・大正	昭和 30 年代まで		昭和 60 年代まで	平成以降

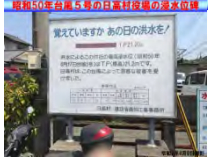
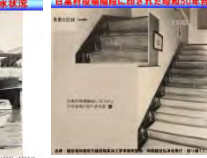
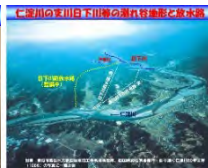
整理番号	高水 15	近代土木の先駆者 広井勇 生誕地碑								
災害種別	水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水			
場 所	高知県高岡郡佐川町甲 9 0 0									
見所・アクセス	近代土木の先駆者 広井勇の生誕地は高知県佐川町であります。生誕地(写真 1)は JR 佐川駅から北東約 400mの旧道に沿いにある川田内科クリニックから山側に上る道を 50m ほど行くと、広井勇先生生誕地・先祖の墓入口という案内標柱(写真 2)があります。その横の小道を上って行くと、山林の麓に畑地があります。そこに広井勇先生の誕生の地の石碑があります。その裏山を約 10m 上った山林の中に、広井家の墓地(写真 3)があります。また JR 佐川駅の南西 400m には、広井勇や「日本の植物学の父」として名高い植物学者牧野富太郎も通った「郷校・名教館」(写真 4)や佐川町出身の田中光顕(みつあき)など幕末維新で活躍した志士や土佐藩筆頭家老深尾家の資料などを展示した青山文庫(写真 5)があります。									
写真・図										
	写真 1		写真 2		写真 3		写真 4		写真 5	
写真・図										
	写真 6		写真 7		写真 8		写真 9		写真 10	
解説文	廣井 勇(ひろい いさみ)は、高知県出身の東京帝国大学教授を務めた「港湾工学の父」と呼ばれた偉人です。 佐川町青山文庫平成 24 年 12 月発行「近代土木の先駆者 広井勇」の小冊子(写真 6)によれば、【広井博士は、文久 2 年 9 月 2 日、土佐藩筆頭家老深尾家の家臣・広井喜十郎の長男として深尾家領内の内原(現佐川町)に生まれ、幼名を数馬といった。・(中略)・明治 3 年 10 月には父を亡くし 8 代当主となった博士は地縁もない高知城下で祖母や母たちと肩を寄せ合い暮らす、祖母たちの内職から生じるわずかばかりの収入では学校に通うことは難しかったと思われる。明治 5 年の夏、義叔父片岡利和(後に男爵)が帰郷してくると、博士は学問を修めるために自分も一緒に東京へ連れていってくれるように義叔父に頼み 11 歳で親元を離れて単身上京する。東京では、片岡家に書生として居候し、英語・数学・漢学などの私塾に通われてもらい勉強をはじめた。」など、学問のため上京したことや広井家の系譜、広井家系図(写真 7)、博士も通った名教館、苦学力行した明治初期の北海道と開拓使仮学校、札幌農学校、入校時の著名な同級生、内村鑑三、新渡戸稲造、宮部金吾ことや札幌農学校での生活、成績表、札幌農学校とキリスト教、技術者としてのスタート、外国留学、さらに博士の功績として、橋梁学、港湾工学、小樽築港、海水の影響を受けない「混凝土(こんくりーと)」の開発や明治 32 年から東京帝国大学工科大学の教授として、岡崎文吉や青山士、八田与一などを教えた】ことなどが詳しく紹介されています。 「歴町さかわ」には、陸援隊の副長として中岡慎太郎を支え慎太郎亡き後は隊長となって昭和 14 年まで生きた田中光顕の収集資料などが展示された青山文庫や牧野公園、佐川地質館、司牡丹の蔵などがあります。その青山文庫には若いころの広井勇の写真 8 が展示されています、曾祖父の遊冥(名教館の教授)、広井先生先祖の墓の写真 9 を、再建された名教館内(畳の部屋に座り机で学ぶ広井勇や牧野富太郎、田中光顕の様子)を再現された展示(写真 10)を示します。 近代土木の先駆者である広井勇は、最近まで高知県でも生誕地である佐川においても余り知られていませんでした。最近になって広井勇生誕 150 年記念特別展示が行われるなど地元でも徐々に知られるようになってきています。皆さんが、広井勇の足跡をたどり、偉大な業績と生き方を知るが大切です。									
得られる教訓	四国の高知に「廣井勇を顕彰する会」ができ、廣井勇の偉業を偲び広く世に伝える活動が行われ、今後、清廉の土木技術者として生きた土木の偉人として広く紹介され、若い技術者が土木事業の誇り意識を醸成する場として、佐川町の生誕地などを一度、探訪することを教えています。									
教訓分類	被害防止		準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前		江戸時代		明治・大正	昭和 30 年代まで		昭和 60 年代まで		平成以降

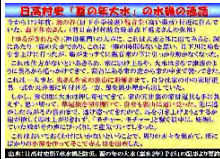
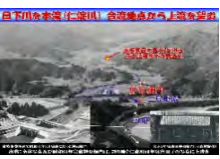
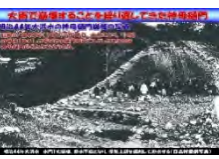
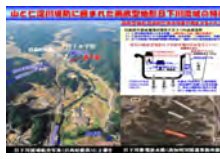
整理番号	高水 1 6	大平寺石段の昭和十年大洪水最高水位標							
災害種別	水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水		
場 所	高知県四万十市右山元町 1 丁目 4-2 7								
見所・アクセス	四万十市右山元町の大平寺（たいへいじ）には、渡川（四万十川）と後川の昭和 10 年洪水の浸水深を示す最高水位標の石碑があります。大平寺は、国道 56 号を中村に向かって走行し、後川の中村大橋を渡って約 100m で右折し、中村駅の方に県道 439 線を約 500m 行った所の交差点を左折し、山側に 150m 進むと少し小高い場所にあります。寺の山門に上がる階段に昭和十年大洪水最高水位標があります。								
写真・図	    								
	    								
	写真 1 写真 2 写真 3 写真 4 写真 5 写真 6 写真 7 写真 8 写真 9 写真 10								
解説文	太平寺（写真 1）にある寺門に至る石段の中程には、既往最大となる昭和 10 年 8 月洪水の爪痕を標した水位標が建てられており、洪水の歴史を伝える貴重な遺産となっています。四万十川と後川に挟まれた中村の町（写真 2）にある太平寺の山門に上がる階段の 14 段目に「昭和十年八月 1935 大洪水最高水位標」と刻字された石碑（写真 3）があります。その時の惨状を四国防災八十八話の 46 話では、地元の方の体験談として「全没した中村の町は、阿鼻叫喚のちまたと化した」した、その背景を、「昭和 10 年（1935 年） 8 月 27 日、台風による降雨が強まり、渡川（四万十川）と後川が甚だしく増水した。具同では 28 日午前 7 時に 3.70m の水位が、翌 29 日には最高 12.07m に達した。27 日の夕方、後川堤防が破堤し中村のまちは全町水に没し、大海（写真 4、5）のようになった。また、破堤したのが夕方であつたため満水が夜中であり、死にものぐるいの阿鼻叫喚の中での避難にもかかわらず、一人の死者も出なかったことは全くの驚異であると伝えられています。」と紹介しています。 昭和 10 年 8 月の洪水は渡川（四万十川）と後川が甚だしく増水し、8 月 27 日の夕方、後川堤防が破堤し、中村のまちの浸水は夜中に最高になっています。その時の中村のほぼ中心の右山元町（写真 5）の最高浸水深を現地調査の結果から推定しました。寺門に至る石段（写真 6）の 14 段目にあることから 1 段の高さを 20cm とすると、14.5 段×20cm＝2.9m となり、下の道路から約 3m になります。階段の下横から撮影し右山元町の住家を望んだ写真 7 からその大きさ規模がわかります。 また、この南北朝時代の文和年間(1352～56 年)の建立された太平寺(写真 8)の『太平寺記録』によると、昭和 4 年から始まった渡川直轄河川改修事業の当初改修計画の対象洪水となった明治 23 年 9 月の大洪水についても、「古来未曾有之凶変也。我高知県幡多郡中村市街村落。毎戸皆無不浸水也。老若男女狼狽相携。避水干山上。終日終夜不食不寝。而遁其難吾神護山。亦門外石磴水浸廿有一階。」とあり、町内を瞬く間に水没させた大洪水の様子を今に伝えています。 現在、中村の町（四万十市街）は堤防等の整備が進み水害の危険性は少なくなっていますが、四万十市街は写真 9 のように四万十川の堤防と後川の堤防に囲まれた低地にあり、もしも堤防が決壊すれば氾濫水が滞留し、浸水深が深い危険性と隣り合わせであります。昭和 10 年 8 月洪水のような大洪水が発生し、大規模な水害が再現される可能性も無きにしも非ずです。平成 28 年 5 月の後川浸水想定区域図（写真 10）では、5m 以上も浸水することになっています。住民の皆さんは、もしもの水害に備えて首尾よく高台など安全な場所に避難できる心掛けが必要です。								
得られる教訓	住民の皆さんが太平寺にある石段にある昭和 10 年洪水最高水位標（既往最大となる昭和 10 年 8 月洪水の爪痕）から、もしも時の地域の水害の危険性を知り、規格外の大洪水に備えることを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで	平成以降			

整理番号	高水 1 7	岡豊小学校平成 10 年高知水害浸水位プレート							
災害種別	水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水		
場 所	高知県南国市岡豊町 9 0 3								
見所・アクセス	平成 10 年高知水害で大きな被害を出した南国市では、高知豪雨水害を忘れないためにと南国市立岡豊（おこう）小学校の浸水位プレート（写真 1）が設置されています。岡豊小学校は国分川と笠ノ川の合流点の岡豊城山跡の山麓の低地にあります。								
写真・図	    								
	    								
	写真 1 写真 2 写真 3 写真 4 写真 5 写真 6 写真 7 写真 8 写真 9 写真 10								
解説文	「高知」はかつて「河内（こうち）」と標記されていたそうです。それほどまでに高知県は昔から度々水害に見舞われ、人々は水害との闘いを続けてきました。平成 10 年（1998）、9 月 24 日未明から 25 日朝にかけて秋雨前線の集中豪雨により、高知県中央部は記録的な豪雨に見舞われます。中でも国分川、舟入川の越流氾濫で一夜の内に「泥海」になってしまいました（写真 2）。高知市の被害は、家屋・事業所等の床上浸水 4,213 棟、床下浸水 1,995 棟、田畑の冠水 1,420ha に及びました。過去の浸水被害をはるかにしのぐ規模で、一般の家屋以外にも、県立美術館、大津食品工業団地のすべての事業所、大津小学校、大津中学校などが水没しました。大津ふれあいセンター（写真 3）前の大津地区水害記録碑（（写真 4）には、2 つの水位が刻まれています。地面からの高さを測ると、昭和 47 年 9 月の国分川決壊最高水位が 138cm に対し、平成 10 年 9 月の集中豪雨最高水位は 223cm でした。また、碑（写真 5）の背面には、再び災害の無いことを願って建立したことが記されています。一方で南国市では、同災害により床上浸水 824 戸、床下浸水 968 戸などの被害が出ました。南国市立岡豊小学校には、校門から入った正面の校舎の壁（写真 6）に写真 1 のように岡豊小学校高知豪雨記録として雨量と浸水位がプレートに記されています。その岡豊小学校の玄関横のプレート（写真 7）の浸水位を測定すると 179cm の高さでした。これは民家の軒下浸水に相当する激甚な浸水です（写真 8 参照）。この浸水位プレートは校舎内と体育館にも設定され、日頃生活する小学生や教員だけでなく、学校を訪れる人々にも水害への備えを呼びかけています。 国土地理院が平成 30 年度より、市町村からの申請に基づき自然災害伝承碑を国土地理院地図に登録・公開していますが、岡豊小学校高知豪雨記録の浸水位プレート（写真 1）は 2020 年 3 月 12 日現在、未登録です。国土地理院ホームページによれば、「自然災害伝承碑」（写真 9）とは、【過去に発生した津波、洪水、火山災害、土砂災害等の自然災害に係る事柄（災害の様相や被害の状況など）が記載されている石碑やモニュメント。・（中略）・これら自然災害伝承碑は、当時の被災状況を伝えると同時に、当時の被災場所に建てられていることが多く、それらを地図を通じて伝えることは、地域住民による防災意識の向上に役立つものと期待されます。】とされています。 この浸水位プレートは、身近な災害履歴を学ぶための学習教材として大変有用であり、先述したとおり実際に学校で活用され地域に情報を発信しています。なお、岡豊小学校は写真 10 に示す国分川の傍に位置しています。 過去の災害の記録や教訓が、書物や石碑などに伝承され、今日の防災に活かせる教訓があるものを防災風土資源と筆者は呼んでいます。浸水位プレーもまた、重要な防災風土資源と呼べるでしょう。								
得られる教訓	岡豊小学校の平成 10 年水害の浸水位プレートは、身近な災害履歴を学ぶための学習教材として、地域住民や学校等によって活用され、災害に備えるため「わがごと意識」を待つことが大事であることを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで	平成以降			

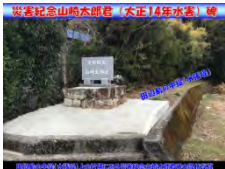
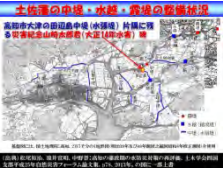
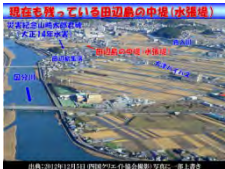
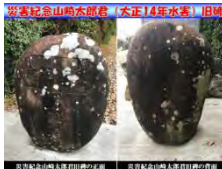
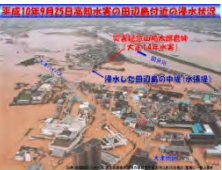
整理番号	高水 18	平成 10 年・昭和 47 年水害の大津地区水害記録碑							
災害種別	水害・治水	地震・津波		土砂災害		渇水・利水			
場 所	高知県高知市大津乙 9 3 0-5								
見所・アクセス	平成 10 年高知水害で大きな被害を出した高知市では、高知豪雨水害を忘れないためにと高知市大津ふれあいセンター前に大津地区水害記録碑（写真 1）が設置されています。大津ふれあいセンターは、高知から国分川を越えて東に大津バイパス（県道 374 号）を約 3km 行くと大津小学校に向かう県道 248 号の交差点を右折した 300m 行った所にあります。								
写真・図	    								
	    								
解説文	「高知」はかつて「河内（こうち）」と標記されていたそうです。それほどまでに高知県は昔から度々水害に見舞われ、人々は水害との闘いを続けてきました。平成 10 年（1998 年）、9 月 24 日未明から 25 日朝にかけて秋雨前線の集中豪雨により、高知県中央部は記録的な豪雨に見舞われます。中でも国分川、舟入川の越流氾濫で一夜の内に「泥海」になってしまいました（写真 2）。高知市の被害は、家屋・事業所等の床上浸水 4,213 棟、床下浸水 1,995 棟、田畑の冠水 1,420ha に及びました。これは過去の浸水被害をはるかにしのぐ規模で、一般の家屋以外にも、県立美術館、大津食品工業団地のすべての事業所、大津小学校、大津中学校などが水没しました。大津ふれあいセンター（写真 3）前の大津地区水害記録碑（写真 4）には、2 つの水位が刻まれています。地面からの高さを測ると、昭和 47 年 9 月の国分川決壊最高水位が 138cm に対し、平成 10 年 9 月の集中豪雨最高水位は 223cm でした。また碑の背面には、「98・豪雨災害でわが大津地区は、未曾有の被害を蒙った。72・水害も想起し、再び災害の無いことを願って、地区内町内会とコミュニティ計画推進市民会議があい計り、この日を建立する。平成 11 年 9 月 25 日 大津地区町内会連合会」と刻字され、再び災害の無いことを願って建立したことが記されています。また南国市でも床上浸水 824 戸。床下浸水 968 戸などの被害が出ました。この時、国分川の傍の低地にある南国市立岡豊小学校（写真 5）は大きな浸水被害を蒙っています。 岡豊小学校には、正面の校舎の壁（写真 6）に岡豊小学校高知豪雨記録として雨量と浸水位がプレート（写真 7）に記されています。その玄関横のプレート（写真 8）の浸水位を測ると 179cm の高さでした。これは写真 9 のように民家の軒下浸水に相当する激甚な浸水になります。この浸水位プレートは校舎内と体育館にも設定され、日頃生活する小学生や教員だけでなく、学校を訪れる人々にも水害への備えを呼びかけています。国土地理院が平成 30 年度より、市町村からの申請に基づき自然災害伝承碑を国土地理院地図に登録・公開していますが、この大津地区水害記録碑は登録されています。この水害記録碑は、身近な災害履歴を学ぶための学習教材として大変有用であります。 国土地理院ホームページによれば、「自然災害伝承碑」とは地理院 HP には、【過去に発生した津波、洪水、火山災害、土砂災害等の自然災害に係る事柄（災害の様相や被害の状況など）が記載されている石碑やモニュメント。・（中略）・これら自然災害伝承碑は、当時の被災状況を伝えると同時に、当時の被災場所に建てられていることが多く、それらを地図を通じて伝えることは、地域住民による防災意識の向上に役立つものと期待されます】（写真 10）とされています。過去の災害の記録や教訓が、書物や石碑などに伝承され、今日の防災に活かせる教訓があるものを防災風土資源と筆者は呼んでいます。この平成 10 年・昭和 47 年水害の大津地区水害記録碑は防災風土資源と言えます。								
得られる教訓	大津地区水害記録碑や岡豊小学校浸水位プレートは、身近な災害履歴を学ぶための学習教材として、地域住民や学校等によって活用され、災害に備えるため「わがごと意識」を待つことが大事であることを教えています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで	平成以降			

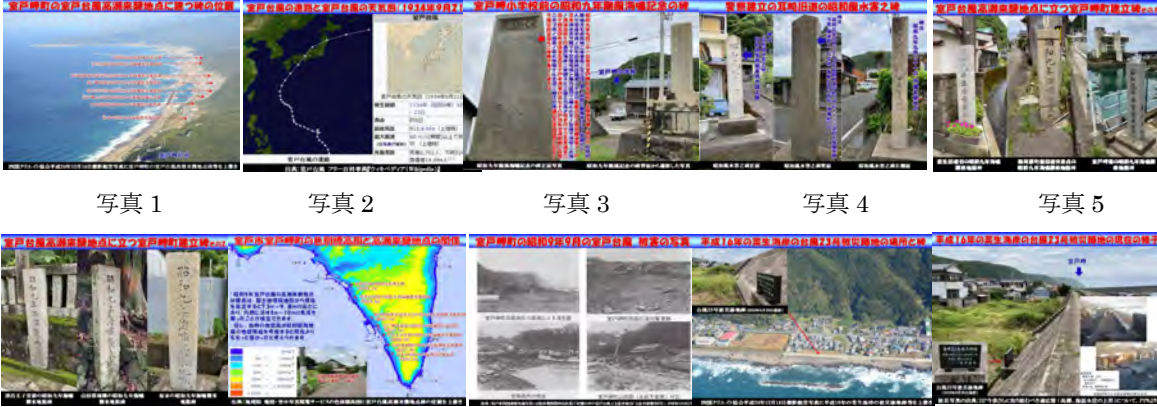
整理番号	高水 1 9	土佐市消防署前昭和 50 年水害防災記念碑									
災害種別	水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水				
場 所	高知県土佐市蓮池 9 7 8-1										
見所・アクセス	昭和 50 年（1975）8 月 17 日の仁淀川水害で大きな被害を出した土佐市では、仁淀川水害を忘れないために土佐市消防署前に防災記念碑（写真 1）が設置されています。その土佐市消防署は、高速道路の土佐インターを出て国道 56 号の交差点を右折し、約 500m 西に走行した国道 56 号沿い（写真 2）にあります。										
写真・図											
	写真 1			写真 2		写真 3		写真 4		写真 5	
解説文											
	写真 6			写真 7		写真 8		写真 9		写真 10	
得られる教訓	昭和 50 年（1975）8 月 17 日、宿毛市に上陸した台風 5 号は、仁淀川上流の中心に集中豪雨をもたらしました。土佐市では、山崩れや用石堤防の決壊、用石・高岡の土佐市市街地・家俊付近の浸水などにより、被害は死者 6 人、負傷者 74 人、家屋全壊 26 戸、家屋半壊 72 戸、床上浸水 2,255 戸、床下浸水 2,100 戸などに及びました（写真 3）。用石堤防が 100m にわたって決壊（写真 4）したため、急激な増水で家財道具などを持ち出す間もなく、中には二階にまで浸水した家さえありました。高岡では市民病院、老人ホームも浸水しました。この仁淀川水害を忘れないため、土佐市消防署前に「災害の傷痕深く防災を」と土佐市消防長が昭和 53 年 3 月 7 日建立した防災記念碑（写真 1）が設置されています。背面（写真 5）には、「昭和五十年八月十七日来襲の台風五号により土佐市は死者六人住家の全半壊・浸水約五千戸に達する未曾有の大災害をうけた消防団は一丸となって自家の被害を顧ることなく被災者の救援と災害の復旧にあたりその功績が認められ翌年九月一日内閣総理大臣表彰の荣誉に輝いた。表記はその浸水位を表したものである」と刻字され、消防団の活躍が記されています。また碑の土台（写真 6）には、この時の浸水位（地面から約 66cm の高さ）が横線で刻まれています。国土地理院が平成 30 年度より、市町村からの申請に基づき自然災害伝承碑を国土地理院地図に登録・公開していますが、この碑は自然災害伝承碑として登録され、身近な災害履歴を学び、50 年水害を忘れないための学習教材として土佐市が情報発信しています。 この被害を受けた波介川流域（写真 7）は、沿川の平野が本川の洪水位より地盤が低く本川から離れるほど低くなる地形（写真 8）となっており、本川の背水による影響を受けて洪水が流出しにくく、古くから頻発する浸水被害に悩まされてきました。このため、波介川合流点を河口まで下げ、仁淀川からの逆流の影響を除き、洪水を安全に流下させる波介川の抜本的治水対策（写真 9）の波介川河口導流が計画されていました。しかし事業が進まない中、昭和 50 年 8 月洪水により、比較的標高の高い土佐市市街地を含め、平地部のほとんどが水没する大水害が発生しました。この浸水被害は昭和 51 年に国土交通省が創設した「河川激甚災害対策特別緊急事業」に採択され、波介川水門を設置し、仁淀川本川からの逆流防止を図りましたが、逆流防止のみでは仁淀川の洪水位の影響を受け波介川からの排水が困難となるため、紆余曲折を経て平成 16 年に波介川河口導流の工事が着手されました。ところが着工翌年の平成 17 年 9 月洪水で、土佐市街地を含め浸水面積 533ha、浸水家屋 111 戸の被害が発生しました。この災害を受けて平成 19 年度に床上浸水対策特別緊急事業として採択され、土佐市住民の長年の悲願であった波介川河口導流（写真 9）が平成 24 年 5 月に完成しました。これにより、平成 26 年 8 月の台風 12 号では、波介水位観測所で、写真 10 の効果図のように、それぞれ約 0.7m の水位低減（波介水位観測所に測定）により、波介川のはん瀬危険水位を下回る水位で抑え、事業前と比較して浸水面積は 63%減少、浸水家屋数は 92%減少という大きな効果を発揮しています。今後も波介川河口導流路によって大きな浸水被害の軽減効果が期待されています。										
	この自然災害伝承碑（防災記念碑）は当時の被災状況を伝えると同時に、地域住民による防災意識の向上に役立つことを教えてくれています。										
教訓分類	被害防止		準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト	
時代	江戸時代以前		江戸時代		明治・大正	昭和 30 年代まで		昭和 60 年代まで		平成以降	

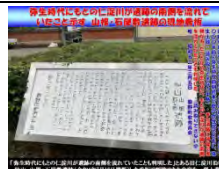
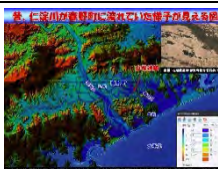
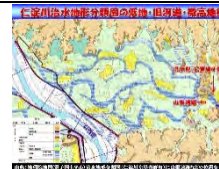
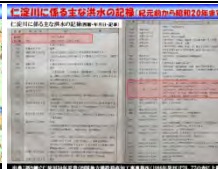
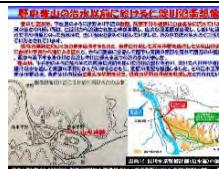
整理番号	高水 2 0	昭和 50 年日下川水害慰霊碑								
災害種別	水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水			
場 所	高知県高岡郡日高村本郷 1 5 8									
見所・アクセス	昭和 50 年（1975）8 月 17 日の仁淀川水害で大きな被害を出した日高村では、仁淀川支川の日下川・戸梶川の氾濫や山崩れが発生し、死者 25 名の犠牲者がでました。この水害を忘れないためにと、日高小学校体育館横の道路脇に慰霊碑（写真 1）が、役場前には当時の被害状況と最高浸水位（標高 21.2m）を示す看板（写真 2）も設置されています。									
写真・図										
	写真 1		写真 2		写真 3		写真 4		写真 5	
写真・図										
	写真 6		写真 7		写真 8		写真 9		写真 10	
解説文	昭和 50 年（1975）8 月 17 日、宿毛市に上陸した台風 5 号は、仁淀川流域を中心に集中豪雨をもたらした。仁淀川本川では基準地点伊野の水位が T.P. 20.12m を記録し、計画高水位 T.P. 20.07m をも上回る戦後最大洪水でした。この集中豪雨は、時短時間の降雨強度の重心が仁淀川中流域から下流域へ、さらに西から東へと移動しており、下流部では仁淀川の最高水位が異常に早く現われた為、仁淀川に合流する諸支川流域では洪水のピークが重なり、流出量の大部分を内水として抱え込む形になり、大氾濫するという災害をもたらしました。日高村では、日下川流域の平地の全てが氾濫したといってもいい被害は激甚を極め、避難する場所さえも失わせた内水氾濫が被害を一層悲惨なものとし、日下川・戸梶川の氾濫や山崩れが発生し、死者 25 名、家屋全壊 71 戸、床上浸水 638 戸などの空前の氾濫被害（写真 3）を蒙りました。									
	この時、8 月 18 日午前、日高村役場の 2 階のベランダに住民が避難して、船で住民を救助している様子が分かります（写真 4）。また日高村役場階段の 10 段目には、「8/17、2.45 分」の最高浸水位の手書メモが印された昭和 50 年台風 5 号の浸水痕（写真 5）が残っています。									
解説文	日下川流域（写真 6）は仁淀川合流地点に近い付近の地盤標高が T.P. 20m 程度であるのに比べ、中心集落の付近は T.P. 19m、上流部が T.P. 17～18m 程度と上流にゆくに従って低くなる。溺れ谷（現在より海面が 5～6m 高い約 6,000 年前の縄文海進期に作られた地形）で、いわゆる低奥地形となっており、写真 7 のように仁淀川下流に合流する支川は、いずれもこうした地形を呈しています。仁淀川合流点には神母（いげ）樋門がある他、合流点より約 1km 上流には、昭和 36 年地盤沈下対策河川事業で完成した派川日下川放水路（延長 3.7m）が仁淀川の八田堰直下に導かれて設置されています（写真 8）。昭和 50 年台風 5 号災害を受けて全国最初の河川激甚災害特別緊急事業として、合流点から約 3.4m 上流の戸梶川合流点を呑口に選び、仁淀川の八田堰下流に排水する全長約 5km の日下川放水路トンネル（昭和 50 年 8 月洪水における内水位を約 1.5m 程度低下させ、床上浸水被害を防御する）が昭和 57 年に整備されました。以来、日下川放水路（写真 9）は多くの洪水で内水氾濫浸水被害を軽減してきました。									
	しかし、平成 26 年 8 月の台風 12 号では、日高村では、159 戸が浸水し、また浸水により国道 33 号が最大約 18 時間の通行止（日高村～佐川町）や JR 土讃線が約 70 時間の運行休止（伊野駅～窪川駅）になるなど交通網が遮断され、甚大被害となりました。この災害を受けて平成 27 年度に仁淀川床上浸水対策特別緊急事業として、日下川では、高知県が整備した旧放水路、昭和 50 年洪水の激甚災害対策特別緊急事業で整備した日下川放水路に続いて、3 本目の新たな日下川放水路延長 5.3km（写真 10）の建設に着手しています。平成 26 年 8 月台風 12 号の洪水規模に対して、床上浸水をゼロの浸水被害軽減を目指して、現在工事が進められています。									
得られる教訓	この自然災害伝承碑は、当時の惨禍の教訓を伝えると同時に、これまでの放水路などの治水対策により地域は発展してきたものの、油断してはならない、溺れ谷の地形特性から内水はん濫が発生する水害リスクは依然存在していることを教えてくれています。									
教訓分類	被害防止		準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前		江戸時代		明治・大正	昭和 30 年代まで		昭和 60 年代まで		平成以降

整理番号	高水 2 1										民家の土蔵に残っていた嘉永 2 年大洪水の痕跡													
災害種別	水害・治水					地震・津波					土砂災害					渇水・利水								
場 所	高知県高岡郡日高村下分 3 6 7 8																							
見所・アクセス	日高村役場近くの国道 33 号の日下川に架かる日下橋の手前約 100m の所を右折し、約 100m 進んだ正寺岡橋の正面に観音堂があります。その横の小道をさらに 50m 進んで所の高台に、西の水（嘉永 2 年大洪水）の痕跡が残る土蔵があった森下家（写真 1）があります。																							
写真・図																								
	写真 1				写真 2				写真 3				写真 4				写真 5							
																								
写真 6				写真 7				写真 8				写真 9				写真 10								
解説文	写真 1 は、高台の森下家の土蔵に残る酉の水（嘉永 2 年洪水）痕跡の様子です。写真 2 は、現在の家主の森下雅文さんから提供いただいた土蔵取り壊し前の写真です。写真 3 は、現在の森下家の土蔵あった屋敷の様子です。森下さんが親から伝え聞いた酉の水の浸水位は、現在の家の鴨居の上であったとのことで、現地で測定すると地盤から 2.8m ありました。また国土地理院地図から森下宅の地盤高を推定すると TP22.0m になり、酉の水（嘉永 2 年洪水）の浸水位は TP24.8m の高さであったことが分かりました。 さらに村史に登場する奥の谷の観音堂付近の浸水深を、森家の土蔵の痕跡から推定したものが写真 4 です。正寺岡橋の正面の観音堂付近では約 5m 浸水していたことになります。 このような日高村の水害の歴史は、野中兼山が新田開発のため八田堰、鎌田堰（万治 2 年（1659）（写真 5）築造以来、仁淀川の河床が上がり、日下川への逆流がますますひどくなり 300 年を超える水と闘いが始まったとされています。日高村史には、凄まじい水禍の逸話（要約写真 6）が記されています。「今から 170 年前、奥の谷観音堂（高い場所）付近に住んでいた、森下作次さん。「ゆるがきたたぞ」の大声に、これは大変と外に出てみると、誠にあたり一面の大水であり、これは一瞬の時間もないと思い、日下川に船を引き上げに行ったが、船がまっすぐに観音堂の下に引っかかり動かなくなった。これは仕方がないといあきらめ、家に駆け上るや、大水はまるで津波のように後ろから追っかけてきて、高台にある家の庭から家の中まで襲ってきた。これは一大事と、奥さんを家の裏山に避難させて、自分は家の中の家財道具一式を天井裏に片付ける一方、馬を馬小屋から出していた。しかし、瞬く間に大水は押し寄せてきて、家の天井裏の家財道具も手に負えず、思い切って、草屋根を切り開いて、自分も裏山に這い登った。先に逃がした馬がその裏山まで、逃げ惑ってきたので、馬を引き上げようとするが崖が険しく馬は上がりきれず、「モチャー、モチャー」と騒ぐ最中に、妊娠していた嫁がその声にびっくりして産気づいてしまった。周りの木々を集めて、形にばかりの小屋を作ってそこで赤ん坊を出産した。」と、この時の様子を日高村建設課長前田修平さんが紙芝居として作成してものが写真 7です。日高村には、「大水 3 日・中雨 2 日（浸水する）」、「蛙がしょうべんすりゃ、はや浸かる」などの格言がある一方、江尻地域の日下川の喉元の最も重要な場所（写真 8）に神母樋門を設けるなど宿命的な水害と闘った歴史があります。明治 44 年の写真 9からも大雨で崩壊することを繰り返してきた神母樋門であったことが分かります。また、写真 10に示すように山と仁淀川堤防に囲まれた日高村の嘉永 2 年洪水の浸水位は、現在の仁淀川堤防に匹敵する高さ TP24.8m になっていて仁淀川が大洪水に見舞われていたことが分かりました。因みに仁淀川浸水想定区域図では日高村役場浸水深が想定最大規模で TP27.3m になっています。日高村は、宿命的な鍋底型地形の水害リスクと低平地の浸水被害は、現在も（写真 10 右上）ように平成 26 年に発生しており、新たに（写真 10 右下）のように 3 本目の新規放水路の整備が行われています。 この森家の土蔵に残っていた嘉永 2 年洪水痕跡や水禍の逸話は、仁淀川で現在の堤防高を超えるような大洪水が発生していたことを伝承する貴重な歴史洪水記録であり、四国の防災風土資源といえます。																							
得られる教訓	この森下家の土蔵の嘉永 2 年洪水痕跡と逸話は、仁淀川の大洪水発生の水害リスクと当時の身近な水禍を学ぶ地域や学校などにおける防災学習教材として活用できることを教えてくれています。																							
教訓分類	被害防止				準備		災害対応		復旧・復興		自助		共助		公助		ハード		ソフト					
時代	江戸時代以前				江戸時代				明治・大正				昭和 30 年代まで				昭和 60 年代まで				平成以降			

整理番号	高水 2 2	日高村旧家の床板に残る嘉永 2 年大洪水の記録							
災害種別	水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水		
場 所	高知県高岡郡日高村本郷 6 2 3								
見所・アクセス	日高村本郷父原集落の橋詰佳幸宅には、嘉永 2 年 7 月 10 日大洪水の「此家座より壺尺六寸上ル」という記録が墨字で記された旧家床板（写真 1）が残っています。その橋詰家は、日高村役場から国道 33 号を西に約 300m 行った警察駐在所の横を右折し、小道を 200m 行った高台に橋詰家屋敷（写真 2）があります。								
写真・図	    								
	    								
解説文	日高村史には、嘉永 2 年（1849）7 月 10 日、大水により、「江尻の井流（ゆる）」と呼ばれる樋門が流亡した。日高村本郷父原のお宅の床板裏面には「嘉永貳乙酉七月十日夜大洪水有此家座より壺尺六寸上ル」（写真 1）と書かれ、このお宅は相当な高地（写真 2）にあるため、日下全村が大海原化したことは疑う余地がない」と記載されています。この床板裏面の「家座より壺尺六寸上ル」浸水の記録は、昭和 41 年に建て替えた際に発見された貴重なものですが、旧家の高さが現在の家と同じと仮定し、現地の橋詰宅の玄関で床上 48.5cm を計測して表すと写真 3 の高さになり、宅地地盤からは 1.1m の浸水深になった。さらに国土地理院地図から橋詰宅の地盤高 TP23.7m を推定し浸水深 1.1m を加えると嘉永 2 年洪水の浸水位 TP24.8m（写真 4）との結果が得られた。日高村の水害の歴史は、野中兼山が新田開発のため八田堰、鎌田堰（万治 2 年（1659）（写真 5））築造以来、仁淀川の河床が上がり、日下川への逆流がますますひどくなり始まった。そのうえ下流の穀倉地を守るために、兼山は日下川合流付近への堤防築造を禁止し、日高村を遊水地帯とするなど、言わば、「大の虫を生かして、小の虫を殺す」と施策をとったため、300 年を超える水と闘いが始まったとされています。日高村には、「大水 3 日・中雨 2 日（浸水する）」、「蛙がしょうべんすりゃ、はや浸かる」などの格言や酉の大水の凄まじい水禍の逸話、さらには江尻地域の日下川の喉元の最も重要な場所（写真 6）を「神母（イゲ）（水の神々への信仰をあらわした地名）」と名づけ、「羽根」や「井流（ゆる）・樋門」の築造を繰り返して、実に羽根 4 回、井流・樋門が 7 回と、大正 3 年（1914）に自動扉の樋門（写真 6 の右下）が完成するまで水と闘ってきたとされています。 記録に「嘉永 2 年（1849）7 月 10 日、大水により、「江尻の井流（ゆる）」と呼ばれる樋門が流亡した」とあるのは、明治 44 年大洪水で水門 1 丈崩壊、排水不能となり、堤防上部を掘削して排水している写真 7 のように江尻地区にあった神母樋門の前進のものと考えられます。写真 8 ように山々に囲まれた低平地の中央部にある橋詰家の嘉永 2 年の酉の水の浸水は、昭和 50 年に発生した内水による浸水（写真 9）とは異なり、江尻地区の堤防の破堤による仁淀川洪水の氾濫によるものであり、その浸水規模は極めて大きい。 写真 10 の鍋底型地形日高村で浸水被害が発生するメカニズムに示すように、その高さは、現在の江尻地区の仁淀川堤防に匹敵する高さで、昭和 50 年洪水に対して 3.6m も高いことが分かりました。因みに仁淀川浸水想定区域図では日高村役場浸水深が想定最大規模で TP27.3m になっています。 また平成 26 年にも内水による浸水被害が発生し、現在 3 本目の日下川新規放水路の整備が進んでいます。この施設完成後も日高村特有の鍋底型地形の低平地からは、浸水がなくなることはないとの考えで、村では土地利用に関する制限を設けるために「日高村水害に強いまちづくり条例」の制定準備を進めておられ、鍋底型地形の低い土地への宅地の乱開発など抑制ができ水害に強いまちづくりができることを期待しています。この旧家の床板に残っていた嘉永 2 年洪水の大記録は、仁淀川で現在の堤防高を超えるような大洪水が発生していたことを伝承する貴重な歴史洪水記録であり、四国の防災風土資源といえます。								
得られる教訓	この床板の嘉永 2 年大洪水の記録は、当時の水禍を伝えると同時に、仁淀川の大洪水発生の水害リスクがあること、身近な災害履歴を学ぶ住民の防災教育素材として活用できることを教えてくれています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代		明治・大正	昭和 30 年代まで		昭和 60 年代まで		平成以降

整理番号		高水 2 3		田辺島の水張堤上の大正 14 年水害記念碑							
災害種別		水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水			
場 所		高知県高知市大津乙									
見所・アクセス		高知市の大津バイパス沿いの高知東警察署前の水路沿いの道路を西北に約 300m 進んだ田辺島地区の旧水張堤上に災害記念山崎太郎君（大正 14 年水害）碑（写真 1）があります。									
写真・図											
	写真 1	写真 2	写真 3	写真 4	写真 5						
写真・図											
	写真 6	写真 7	写真 8	写真 9	写真 10						
解説文		この大正 14 年水害記念碑のある田辺島地区の水張堤は、土佐藩が高知城下町の建設に取り組むに当たって、重要な城下町の水害の軽減を図るため、洪水対策として城下町の周辺に高い堤防を築き、近郊近在の河川に霞堤や水越（越流堤）、内陸の平地には多くの中堤（水張堤）を設けました。写真 2 に示すように、高知城下の東側や北側の平地に流れ込む大きな川、国分川や舟入川には、霞堤や水越（越流堤）を設けて、上流部で氾濫させて下流部での氾濫量を抑える工夫がされています。また人家と田畑の境などに、中堤または水張堤と呼ばれ、氾濫後もその堤の高さまで水を張り、重要な場所を洪水や高潮から守る堤防が築かれています。 当時は国分川の洪水をそのまま河口付近に流せば、鏡川の水位は上がり高知城下は大きく浸水する。高知城下の水害をできるだけ少なくするためには、国分川の洪水を大津・高須の広い地域に流し込み、遊水地とする必要があったと考えられます。現在は大半の水張堤は土地開発に伴い撤去されていますが、田辺島の水張堤（現在でいう 2 線堤）は、航空写真（写真 3）のように国分川の氾濫から守るために田辺島集落と田畑の境に残っています。 災害記念山崎太郎君（大正 14 年水害）旧碑（写真 4）は刻字が見えにくくなっていますが、令和元年建立の新たな記念碑（写真 5）には、「大正 14 年 9 月 17-18 日 国分川大洪水に依り未曾有の大災害を被り水張堤防上浸水 2 尺に達し、人家の倒壊、半壊その他財宝を失う事莫大にして人命を損する者 2 人、堤防決壊水張 145 間…」などとあり、国分川の大洪水により水張堤防の上約 60cm まで浸水し、死者 2 名、約 261m にわたる水張堤防の決壊など莫大な被害をもたらしたことが記されています。 田辺島水張堤上にある大正 14 年水害記念碑（写真 6）より、当時の水張堤は、現在の水張堤上の道路より 60cm 程度、高く約 2m 程度の高さの堤防であったことが推定できます。また写真 7 や写真 8 のように田畑側には、国分川の氾濫水を舟入川に排水する水路が設けられ田辺島集落に通ずる道路として保全されています。これまで多くの国分川氾濫で 2 線堤として田辺島集落の被害を軽減してきたと考えられます。しかし、この水張堤も国分川の大洪水で周辺低平地を中心に大きな浸水被害を発生させた 98 高知大水害では、写真 9 のように、大正 14 年洪水と同じよう田辺島集落を水害から守ることは出来ませんでした。 このことは、現在でも高知平野は「河中」（こうち）の由来が伝承する宿命的水害地帯から脱却できていないこと表しており、自然界からすれば起こるべくして起こった水害ともいえます。 気象変動下、今後、想定最大規模の洪水が発生した場合は、高知県の国分川洪水浸水想定区域図（写真 10）に示すように、田辺島集落、水張堤も 0.5m～3m 浸水することが想定されています。 この田辺島の水張堤上の大正 14 年水害記念碑は、水張堤が現在は 2 線堤になって集落を守る象徴として過去、現在、未来を繋ぐ国分川水害の貴重な防災風土資源であると云えます。									
得られる教訓		この水害碑は、藩政時代に造られた水張堤が現在でも重要な集落を守る象徴として、残され現在の 2 線堤の機能を果たしてきた水害の歴史に学び、それでも大洪水の発生時には機能できないことが起こる水害リスクを考え、今後の流域治水対策に活かすことを教えてくれています。									
教訓分類		被害防止		準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代		江戸時代以前		江戸時代		明治・大正	昭和 30 年代まで		昭和 60 年代まで		平成以降

整理番号	高水 2 4	室戸台風高潮襲来地点に立つ室戸岬町の石碑群(室戸市)							
災害種別	水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水		
場 所	高知県室戸市室戸岬町								
見所・アクセス	室戸市役所から室戸岬に向かって国道 55 号を約 700m 走行する左側に集落に入る旧道があります。その旧道を南に約 300m 行った所に、室戸台風高潮襲来地点を示す警察建立の「昭和風水害之碑」があります。さらに 550m 先に室戸岬町建立の「昭和九年海嘯襲来地点碑」があり、さらにその先、2.8km の間の旧道沿いに同じ碑が 5 基あり石碑群となっています（写真1）。								
写真・図									
	写真 1	写真 2	写真 3	写真 4	写真 5	写真 6	写真 7	写真 8	写真 9
解説文	室戸台風は、1934年（昭和9年）9月21日に高知県室戸岬付近に上陸し、上陸時の中心気圧911hpaは、現在でも観測史上最低とされており、京阪神地方を中心として甚大な被害をもたらした台風で、記録的な最低気圧・最大瞬間風速を観測し、高潮被害や強風による建物の倒壊被害によって約3,000人の死者・行方不明者を出した（写真2）。枕崎台風（1945年）、伊勢湾台風（1959年）と並んで昭和の三大台風の一つに数えられる巨大台風として有名です。『高知県災異誌』（昭和41年日本気象協会高知支部）には、「室津港では丁度満潮時に合致して、朔望平均満潮面上約3.7m」の高潮と記されています。台風が上陸した室戸市では、高潮による被害が大きく、室戸岬灯台の北側の室戸岬町の集落に高潮災害の碑が多く残っています（写真1）。 その一つは、室戸岬小学校前にある室戸岬町建立の昭和九年颱風海嘯記念の碑（写真3）です。碑文から、被害概要を読み取ると、「昭和9年9月21日午前4時頃、室戸岬町では気圧約912hpa、風速60mに至った。12mを超える高波が3回襲い、死者63名、負傷者300余名、家屋流失・全壊550戸、半壊678戸、船舶の流失・全壊200隻に及ぶ被害を受けた。田畑は見る影もなく、家も食べ物も無くなった」ことなどの未曾有の惨状が記されています。 二つ目は、室戸岬町の高潮来襲地点に建つ碑です。2022年6月26日の現地調査では、写真1に示すように北から耳崎の旧道沿いの警察建立の「昭和風水害之碑」（写真4）、次に室戸岬町建立の昭和九年海嘯襲来地点碑（写真5、6）が確認できました。この昭和九年海嘯襲来地点碑が、菜生旧道谷、西河原町新旧道交差点、室戸岬港北端、津呂王子宮前、山田邸南隣、坂本に残っていました。これら高潮来襲地点の碑を、国土地理院WEB地図から算定すると、色別標高図（写真7）に示すとおり、標高7.5m～9.8mの高さにあり、現在の標高5m～10mの土地の集落を襲ったと推定できます。それはほぼ旧国道沿いに沿った線になっています。 島村泰吉「記憶の中の室戸台風」（土佐史談第224号（2003年））には、「旧国道は、室戸岬町坂本の現在のスカイライン登り口から山田邸前、津呂港（室戸岬港）を経て、高浜、菜生、耳崎と山すそを通っていたから、山すそに続く狭い平地にあった集落の家が多く流出している」としています。また室戸市民図書館所蔵写真から被災写真（写真8）を示し、室戸台風の凄まじい被害の様子を紹介しています。 昔から災害は繰り返す歴史があります。近年では昭和 36 年の第 2 室戸台風をはじめ、昭和 25 年のジェーン台風や昭和 34 年の伊勢湾台風は、室戸岬への直接上陸又は接近通過し大災害をもらしています。また最近では平成 16 年台風 23 号で高潮と高波によって菜生海岸の堤防が倒壊し大きな被害を受けています。被災跡地には「災害の恐ろしさを忘れない」と刻まれた碑が立っています（写真 9、10）。室戸市の沿岸部は、海と背後の山に挟まれた土地に集落があり高潮災害の危険性が高いことが分かります。これらの高潮記録や室戸台風高潮来襲地点石碑群は、過去の自然災害の教訓を子孫の私達に伝える防災風土資源といえるものです。								
	得られる教訓	室戸岬は「台風銀座」と呼ばれている所以は、およそ 90 年の我が国気象史上に突出した昭和 9 年 9 月の室戸台風が上陸したことに始まるという。高潮来襲地点を示す碑や被害の様子を記録した碑は、高知県東部の高潮災害の歴史を知る上の貴重な伝承であり、今日の高潮災害への備えとして、四国沿岸の高潮災害のリスクを学ぶための素材として、災害教訓を今後の防災に活かしていくことを教えてくれています。							
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代	明治・大正	昭和 30 年代まで	昭和 60 年代まで	平成以降			

整理番号	高水 2 5	春野町庄屋の「洪水記」と山根遺跡に見る仁淀川大規模洪水(高知市)							
災害種別	水害・治水		地震・津波		土砂災害		渇水・利水		
場 所	高知県高知市春野町秋山								
見所・アクセス	高知から春野総合運動公園に向かって県道 36 号線を走行して、運動公園前の交差点を左折し南に 600m 進み右折し 1.5km 先の春野中学校前の高知市春野文化ホール ピアステージの中に春野地域の歴史を紹介する春野郷土資料館があります、その南の新川川に架かる山根橋を渡った山根集落に山根遺跡(写真 1)があります。								
写真・図									
	写真 1		写真 2		写真 3		写真 4		写真 5
写真・図									
	写真 6		写真 7		写真 8		写真 9		写真 10
解説文	高知市春野町秋山の山根遺跡の看板(写真 1)に記された「遺跡に砂礫の堆積があったことから弥生時代に、もとの仁淀川が遺跡の南側を流れていた」というものが、仁淀川の流れで最も古い記録です。当時の仁淀川の下流は、春野町弘岡の下流で大きく 2 つに分かれていました。一本は現在の仁淀川本川、もう一つは現在の新川川の流れと同じで、甲殿で太平洋に流れ込んでいました(写真 2)。弥生前期末、大洪水があったことは、山根遺跡発掘により確認されています。遺跡には、30～40cm におよぶ砂礫層の堆積がみられ、「山根・石屋敷遺跡」(春野町教育委員会刊昭和 51 年 3 月)によると、この堆積から確認し得た洪水は、「1. 縄文後期中葉(約 3000 年前)、2. 弥生前期中葉(約 2150 年前)、3. 弥生中期初頭(約 2000 年前)、4. 弥生中期末(約 1800 年前)の四時期である。そのうち 1・4 は大規模洪水であり、2・3 は割合に小規模である。」とあります。また仁淀川治水地形分類図の低地・旧河道・微高地等(写真 3)からも仁淀川の昔の流れが想像できます。 四国地方建設局高知工事事務所が昭和 61 年にまとめた仁淀川に係る主な洪水記録(写真 4)によると、仁淀川には紀元前から洪水が頻発していることが分かります。また野中兼山の治水以前に於ける仁淀川氾濫想像図(写真 5)から、当時の仁淀川は伊野より下流の吾南、高東平野を縦横に自由奔放に流れていたこと、低い所は氾濫をくり返していたこと、兼山は荒れはてた河原に堤防を築いて河川の整理を行い堰などを設けて治水・利水事業を行ったことが分かります。また土佐国図(写真 6)から現在の流路に同じくそのまま南流するものと、東岸に分派して吾南平野を東流して南の甲殿から海に入る流れがあったことが確認できます。 江戸時代の暴風洪水の詳細記録としては、寛文六年(1666)と嘉永二年(1849)が代表すると言われていいます。中でも「酉の年の大水」として今日も古老に語り継がれている西分村(春野町)庄屋の辻儀之助著「洪水記」は有名で、洪水記には「七月七日、八日日和にて浪立ツ。九日も浪立くもり候処、昼頃ヨリ雨大降、夜分風も吹、十日時化ニ相成、尤夕方から夜分に掛ケ風吹、自宅うごき申事、表ノ前から少し西ノ方ニ有之銀杏ノ木根忙ニ成ル、本廻式尺 7 寸有り・(中略)・翌十一日朝卯刻過頃未ター同寝居申候所、大寺組頭弥助掛来り、新川切レ洪水ニなり候段申来り」とあり、嘉永 2 年 7 月 9 日より大しけ、10 日夜から大水、寺板敷より 82cm 上り、11 日朝 7 時頃、新川切れ洪水になったことが体験談として記されています。 この洪水記に登場する西分の中心地や大寺は写真 7 に示す場所であり、現在の新川川と西分、大寺廃寺跡(推定)の状況は、今回の現地調査(2022 年 7 月 17 日)の写真 8 に示すとおりです。また現在の春野町の水路や川などの地形がよく分かる模型(写真 9)に示すように山根遺跡の直ぐ近くであることがわかります。春野町の洪水ハザードマップ(写真 10)に山根遺跡と西分の位置と南側の低地(海拔 4.4m)の現在の様子を示します。高知市春野町の平地部は、海と背後の山に挟まれた低地の土地に集落があり、もし仁淀川が氾濫した時は、水害の危険性が高いことが分かります。これらの遺跡調査や洪水記の記録は、過去の自然災害の教訓を子孫の私達に伝える防災風土資源といえるものです。								
得られる教訓	前半の山根遺跡の発掘調査記録は、仁淀川の大昔の川筋で発生した洪水氾濫を示すもので、後半の「洪水記」は、西分村(春野町)庄屋の筆者が体験をもとにした暴風洪水の模様を後世に伝える貴重な伝承であり、今日の水害への備えとして、沿川地域の災害リスクを学ぶための素材として、今後の防災に活かしていくことを教えてくれています。								
教訓分類	被害防止	準備	災害対応	復旧・復興	自助	共助	公助	ハード	ソフト
時代	江戸時代以前	江戸時代		明治・大正	昭和 30 年代まで		昭和 60 年代まで		平成以降